

## 小規模作業所における精神障害者の地域生活支援の意味の検討

### - 当事者の「語り」から -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
松岡 美江

『障害者白書(平成19年度版)』(総理府,2007)によれば、今日、日本には精神障害者が約303万人いると推計されており、このうち9割近くが地域で生活を送っている。このような当事者にとって、小規模作業所は重要な場となっている。2004(平成16)年の障害者基本法の改正や2006(平成18)年に障害者自立支援法の施行など、障害者の自立や就労を目指す方向に法整備が行われている。では、果たしてこうした流れと同様に、自立や就労を目標として当事者は小規模作業所を利用しているのだろうか。

そこで、本研究は精神障害者を主体性を持った生活者として捉え、小規模作業所の利用者のインタビューをもとに、地域で生活を送る利用者にとって小規模作業所はどのような意味を持っているのか、そして、そこからどのようなことが地域生活支援において大切であるのかを考察した。研究方法として、インタビュー調査を著者がボランティアとして参加していたD市内のA・B両共同作業所で同意を得られた計7名のメンバーに対して実施した。ここでは「作業所を利用すること」に焦点をあて、半構造化面接法を用いて進めた。分析の過程では、エスノグラフィーの視点、つまり「人びとから学ぶこと」を重視した。事実との整合性など以上に、「語り」において示される語り手の意味の一貫性に留意し、同時に「語られないこと」にも配慮した。インタビュー内容は、研究協力者全員分を逐語録にし、そこから作業所利用に関する事項を整理し、代表的な事例をとりあげ、その「語り」の分析を試みた。その結果、小規模作業所に関して以下のようなことが見えてきた。

精神障害はその障害の特性ゆえに、自分で語ったことも疾患であると捉えられてしまう。それでは、自分の人生の主人公にはなれないのである。自分という一人の人間が止めることのできない、生きていくことの歩みの中で、安心して上がったり下がったりすることができ、人生という自分の舞台の主人公となれる場が小規模作業所なのである。そして、いつでも安心して戻っていける場として存在している。人生で上がったり下がったりを繰り返す中で、下がった状態となったときに支えとなるものに自己価値がある。小規模作業所を利用し始めてすぐに自己価値を感じることは困難である。だが、そこを焦らすことなく、見守り、支援していくのが小規模作業所の果たしている役割なのである。そうした支援を続けていくうちに、自己価値に気が付き、自分で上がろうとする気持ちや力が出てくる。それは、また何らかの理由や出来事で下がってしまうかもしれない。だが、それは人が生きる歩みの中で当たり前なことでもある。誰しもが上がったり下がったりしながら、自分の人生を歩み続けるのである。一人の人が当たり前前に生きていくことの歩みを感じることができる。そうした一人の人の歩みを小規模作業所は支え続けてきたのである。そこに小規模作業所が存在する大きな意味があるのだと思われる。